

## 第20回国際神道セミナー『海と神道』開催 平成30年度社員総会同時開催

平成30年3月16日、東京都千代田区の学士会館において第20回の節目を迎えた国際神道セミナーが開催された。『海と神道』をテーマとし、宮城学院女子大学より大内典教授を基調講演者として招き、これまで見落とされがちであった神道と海との関わりについて探求を深めた。セミナーに先立ち、神道国際学会平成30年度社員総会が出席者274名（委任状出席を含む）によって開催され、前年度の事業・決算報告および次年度の事業計画・予算が提議・採決された。



多くの関心を惹きつけた「海と神道」



活発な討論が展開された会場

### 社員総会にて各議案を決議

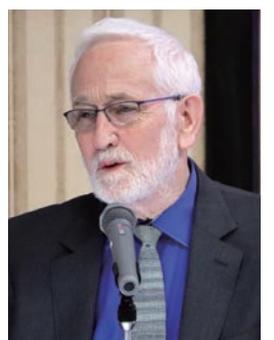
神道国際学会平成30年度社員総会は三宅善信理事長の開会宣言によって開始された。定足数の説明、出席役員の紹介に続き、議長の出発が提議され、塩谷崇之理事が議長として選出された。塩谷議長の進行のもと、第1号議案として平成29年度の事業・決算報告および監査報告が三宅

理事長よりなされ、全会一致をもって承認された。この事業報告では、前年度に開催したセミナー『日本人の死後の世界（異界）観』やシンポジウム『教派神道の謎と魅力』、欧州宗教学会パネル出展、また京都での第4回フィールドワークなどの活動について、各イベントの意義や経費に踏み込んだ説明がされた。

さらに、第2号議案において、次年度もセミナーやシンポジウムまた出版物の発行を中心に本会の活動を広げていくことが、その予算とともに提案され、全会一致をもって承認された。本会では毎年3月上旬に社員総会を開催し、その決議を受けて管轄庁である都庁へ必要事項を報告している。

### 『海と神道』を音曲やエビス信仰から考える

社員総会に続き、国際神道セミナー『海と神道』が開催された。今回は第20回となる記念のセミナーである。はじめに、マイケル・パイ会長（マールブルク大学名誉教授）が、海を基点に神道や日本文化を考えることの意義を強調して開会の挨拶を述べた。



開会挨拶をするパイ会長



基調講演者の大内教授

神道は山や稲作と関連付けられて語られることが多いが、島国である日本における神道と海との関係はどのようなのか、またその関係が語られることが少ないのはなぜなのか、大内典教授（宮城学院女子大学）の基調講演をもとに本会の三宅善信理事長（金光教泉尾教会総長）、ファビオ・ランベッリ理事（カルフォルニア大学サンタバーバラ校教授）、マーク・テーウエン理事（オスロ大学教授）が議論を展開した。

宗教儀礼における声や音の機能を研究する大内教授は、島根県松江市の美保神社に鳴り物（楽器）が多数奉納されてきたことに注目する。「美保神社の主祭神である」エビスが鳴り物を好むので、ここ（美保神社）へ鳴り物を奉納すると願いが叶う」という信仰がいかにして形成されてきたのか、海の神であ



大いに盛り上がりを見せたパネルディスカッション

るエビスに人々が見出してきた様々な側面と音曲はいかに結びついていくのか、そして、このような信仰が持つ意味とは。大内教授はこれらのポイントについて、「龍神」と「エビス信仰」と「鳴り物」の三つをキーワードとして講演した。

大内教授は、現地へ足を運ぶフィールドワークの際に自ら撮影した数多くの画像や聴衆の理解を助ける図表を示しながら、軽妙な語り口で講演を進め、聴衆はその講演内容の奥深さに引き込まれ、また随所に散りばめられたジョークに会場全体が笑いの渦に引き込まれることも度々であった。

### 日本人の信仰に見る垂直的考え方と水平的考え方

基調講演に続き、三宅理事長をモデレータとして、大内教授、ランベツリ理事、テウエン理事によるパネルディスカッションが行われた。

海に近い土地に生まれ育ったランベツリ理事は、日本では海岸部の開発によって人々が海か



モデレータを務める三宅理事長



セミナーテーマ提案者でもあるランベツリ理事

ら遠ざかってしまったことを歴史を振り返りながら指摘した。その上で、垂直的世界観を持つ山岳信仰と比較して、沖へ向かっていく水平的世界観の海洋信仰について述べた。これを受けて、モデレータである三宅理事長は、九州や伊豆地域の明神大社を例に、離島に鎮座する神の古さと多さを指摘した。

### 海と大嘗祭

続いて、神職の資格を有するテウエン理事は、その修行・



独自の視点からコメントを述べるテウエン理事

研究の経験の中から、大嘗祭と海との関連について語った。古代における大嘗(おほなま)祭(大嘗祭の原型)では、天皇が「海の力」を得るということが重要であった点を指摘。その後、時代とともに「海の力」ではなく水や稲作に関わる能力へと重点が変わっていったことを述べた。

これらの指摘に対して、大内教授はどちらも「海から遠ざかっていく」という共通の視点があり、それは

征服者と被征服者の関係——内陸系の朝廷と先住の海の民族との関わり——の中にある支配という観点で考えられることを説明した。

三宅理事長はまとめとして、海と日本人の信仰との関わりについて、古代から現代までに失われてしまったもの、現代でも脈々と受け継がれているものについてコメントを述べた。

本セミナーでは、昨年のイベントアンケートで要望の多かった質疑応答時間の拡大を実現することができた。会場の参加者からは講師・パネリストへ多くの質問が投げかけられ、各々の興味や関心をぶつける活気にあふれるセミナーとなった。

最後に、芳村正徳常任理事(神習教教主)が閉会の挨拶に立ち、



多くの聴講者から質問が投げかけられた



閉会挨拶で謝意を表す芳村常任理事

本セミナーは神道の現場に身を置く者にとっても、新しく学ぶことのできる機会であったこと、また来場者各位が高い関心をもって参加されたことにより、セミナー自体の意義が高まったことを述べ、主催者としての感謝を示して締めくくった。

# 第5回フィールドワーク／秩父神社・

## 秩父今宮神社・有恒神社ほかを巡る

### 神仙・山・水への信仰が重層する秩父路へ

第5回フィールドワークが4月9日、陽春の秩父路（埼玉県）を舞台に実施された。会員ら15名が参加し、悠久の社史とともに霊験もあらたかな秩父神社と秩父今宮神社、および両社にゆかりの聖地を歩いた。秩父今宮神社の宮司で弁護士、また本会の理事でもある塩谷崇之師が、一行の案内役を買って出てくれた。

一行はまず「お旅所」へ立ち寄った。「秩父夜祭」（12月2〜6日）で、3日深夜に厳かな齋場祭の執行される聖所である。神幸行列と6台の山車（屋台・笠鉦）もここに結集し、「夜祭」はクライマックスを迎える。「お旅所」の一角に、「亀の子石」という石像の鎮まる齋場がある。齋場祭では、この亀石の



秩父神社で

「お旅所（亀石）」と「大蛇窪」は地図上で一直線にあ

り、「これを秩父神社の信仰軸と呼ぶ」と塩谷宮司。「こうして亀と蛇が一体化すると『玄武』に化すそうで、これにより神社のパワーは増すとも言われている」と補説した。

「大蛇」というのは、水を司りながら秩父盆地の農耕を見守る「龍神」である。収穫も終わった初冬、この水の神霊は里から山へ帰っていく。それを感謝を込めて見送るのが「秩父夜祭」の本質で、そこにこそ太古からの素朴な信仰観念が籠もっている。じつは、武甲山の水脈は、伏流水となって盆地へと下り、今宮神社の龍神池に噴き出す。農

歌舞伎あり、その曳き回しの威勢あり、さらには「お旅所」から仰ぐ冬の花火あり……と、「夜祭」は芸能の粋を総合した祭礼文化であることが伝わってくる。挨拶にこられた園田稔宮司は「これからの地方再生は、既存の政策では駄目。祭も含めた文化的視点から考えるしかない」と思っ

たのではないかと語った。一行は秩父まつり会館、札所二十八番・橋立堂なども巡り、最後に有恒神社を訪れた。同神社は、秩父セメントの関連企業が管掌する神社。旧・工場敷地の一角に鎮まり、天照大神などの社殿のほか、招魂社がある。本会のマイケル・パイ会長は、かつてこの有恒神社を調査したことがあるという。武甲山は霊峰だが、石灰岩から成るため、近代に入るとセメント原料の採掘が進み、姿が大きく変容した。パイ会長は、沈黙のうち



今宮神社・龍神木の前で塩谷宮司から説明を聞く

# 欧州宗教学会で 2度目の神道セッション開催

6月17日から21日まで、スイスの首都ベルンにあるベルン大学を会場に、2018年欧州宗教学会(EASR)の年次大会が開催され、欧州を中心に世界各国から500人を超える学者たちが集まった。神道国際学会では、昨年のベルギー大会に続き、2度目の「神道セッション」をこのEASRで企画・開催し、マイケル・パイ会長を議長とする8人の学者による熱いセッション「日本における宗教アイデンティティの多様性」を展開した。

中世の姿を今にとどめる歴史ある街ベルンで開催された欧州宗教学会の今年のテーマは「Multiple Religious Identities in Japan」と題するセッション

を企画。EASRでは2度目となる「神道セッション」を、6月18日の午前と午後3時間にあつて開催した。



ISSAパネル発表の講師陣

今回のセッションを総括したライプツィヒ大学のカティジャ・トゥリプレット教授によれば、排他性(exclusiveness)を強調する一神教文化においては、「ひとりの人がいくつもの宗教に属す」という考え方は、驚き以外の何物でもない。ところが、日本の宗教文化においては、「神も仏も信仰する」という融通無碍なる習慣が、長い歴史を通して、ごく自然に行われてきたのである。もともと、この日本の神仏習合思想は、明治時代に強行された神仏分離政策によって変容を余儀なくされ、今や日本人自身が、その伝統を忘れてしまっているのだが。今回のセッションでは、このユニークな日本の神仏習合の歴史的事実を、アメリカ、ヨーロッパ、日本から集まった8人の学者たちが、様々な事例を紹介し

ながら論じ合うこととなった。

最初に、議長であるマイケル・パイ会長が、このセッションの趣旨を説明。昨今の神道研究においては、従来の観念的アプローチに代わり、歴史的・客観的アプローチが主流となり、その豊富な研究成果から、日本人の歴史的事実により即した、中世以来のユニークな「神仏習合思想」の有り様が明らかにされつつあることが紹介された。続いて、麗澤大学の岩澤知子教授は、「中世の諏訪大社における神と仏の融合」と題して発表。御柱祭で知られる諏訪大社は、古来の純粋な自然信仰を今に伝えるように見えながら、実は中世に、古来のカミ信仰と真言密教とを融合した「諏訪流神道」と呼ばれる固有の信仰形態を生み出し、その影響が、諏訪大社の社殿の構造や儀礼に残されていることを指摘した。

また、コロンビア大学のマツ



ベルン旧市街風景



ISSAパネル発表風景

クス・モーマン教授は、「伊勢神宮における隠された仏教信仰」と題する発表で、伊勢神宮とその背後にある朝熊山(金剛證寺)との密接な神仏習合の実態を分析。中世から近世にかけて伊勢の内宮・外宮の神官たちが、自らの死後の祀りにおいて、いかに仏教と深く関わったかを明らかにした。さらに、関西外国語大学のエリザベス・ケニー教授は、「吉田梵舜の生涯における仏教と神道」と題する発表で、吉田神道を興した吉田家に連なる僧侶・梵舜が遺した『梵舜日記』を詳細に読み解きながら、中世以降、「神道」の確立を企図したはずの吉田家が、仏教といかなる関係を結んでいたのかを論じた。

午後の部の、モスクワ市立大学のラーダ・フェディアニーナ教授による「天台僧・慈円における神の概念」と題する発表は、天台僧かつ歴史家として知られ

る慈円を取り上げ、「愚管抄」を初めとする様々な作品を分析しながら、仏教僧・慈円が説く、中世的「カミ」観念を分析した。それに続く、大谷大学のロバート・ローズ教授は、午前の部からの「神仏習合思想」を肯定する議論から一転して、「浄土真宗は、なぜ神道のカミ信仰を否定するのか」と題する発表を展開。親鸞が興した浄土真宗が、神道のカミ信仰を徹底的に批判したことを紹介。ところが興味深いことに、その親鸞の教義とは裏腹に、浄土真宗を信仰する一般庶民たちは、神仏習合の習慣からなかなか離れることができなかったという事実をも提示した。最後に、ベルリン自由大学のマールカス・ルーシユ博士が、「浄土真宗派・錦織寺に存在する神社」と題する発表で、ローズ教授の後半の主張を、具体例によってサポートする議論を展開。浄土真宗派寺院の中で珍しく、神社の併設が観察される滋賀県の錦織寺に着目し、教義に反して、民衆レベルで神仏習合を実践するにいたった錦織寺の歴史を分析した。

昨年から今年にかけての神道国際学会の三つのイベント「EASR神道セッション・ルーベ」第17回国際神道シンポジウム「EASR神道セッション・ベルン」を纏めた書籍を、英国の出版社より2019年に出版予定。乞うご期待!



## 神社巡り⑪

マイケル・パイ

マールブルク大学名誉教授

# 出雲大社東京分祠

●東京都港区六本木7丁目18-5

東京都港区の六本木にそびえるビル群と高速道路の間に隠された空間。そこに<sup>おおくにぬしのおおかみ</sup>出雲大社東京分祠を見つけることができます。それは、鳥根県の出雲大社からはるかに離れおり、鉄とコンクリートの社殿ではありますが、ここでも<sup>おおくにぬしのおおかみ</sup>大国主大神が祀られています。東京全域から多くの人が電車・バス・自家用車でやって来ます。また、この神社は「東京で見べきものリスト」のひとつに挙げられているので、外国人観光客も見られます。しかし、おそらく彼らは、鳥根県の出雲大社のような伝統的木造建築ではないということに失望してしまうかもしれません。しかし、ここには出雲大社と同様の儀式や習慣があります。ですから、この神社を訪れるために、あなたがあたかも2階に上がるかのように階段を登らなければならないとしても、決して気にしないでくだ



階段の先に拝殿を仰ぐ

さい!

私は2018年3月17日にこの神社を訪れましたが、これは神語奉書浄書会として知られる子どもたちのための特別な活動の期間でした。今年、3月15日、3月17日、3月18日、3月21日と4月1日に行われ、招かれた子供たちは、特別な書道(浄書)のために、自分自身の筆、あるいは筆ペンを持って参加します。書上げたものは奉書として神に捧げるのです。

浄書の文言は、神語(神の言葉)と呼ばれ、8文字で構成され、次の通りです。

幸魂 奇魂(さきみたま くしみたま)

／豊かな精神 神秘的な精神

守給 幸給(まもりたまひ さきはへたまへ)

／お守りください 豊穡をお与えください

この祈りは、古来より、出雲大社で受け継がれてきました。東京分祠では、「心を浄化し、内的な力を与え、日々を楽しく過ごすための祈り」として説明されています。

これとは別に、この神社では、出雲大社が有名な縁結び、そして家内安全、商売繁盛、厄除け、交通安全、旅の安全、心願成就、合格祈願、心身健全、病気平癒などの様々な一般的な祈禱も行っています。そして、このような請願に加えて、お宮参り、七五三、結婚式などの個人儀式のための祈禱も行っています。

これらの請願というのは、多くの神社に共通の特徴ですが、大社教特有の儀式もあります。出雲屋敷地鎮祭がそれです。この儀式では、方位の凶相から家族を守るために、人気のある神である大黒さまが、人々と同じ屋敷に住むように招かれるのです。この大黒さまの役割は、<sup>おおくにぬしのおおかみ</sup>大地主神という古来のもうひ

ビルの間に鎮座する出雲大社東京分祠



とつの名前に反映されています。これは、日本全国に何千人もの氏子がいる<sup>おおくにぬしのおおかみ</sup>大社教として知られる神道教派の典型的な儀式です。特に興味深いのは、通常の一度きりしか行われぬ地鎮祭と違って、出雲屋敷地鎮祭は毎年のように繰り返されることです。それによって、氏子は幅広い宗教コミュニティとして結束するのです。

多様な教えを「神道」として広めることを禁ずるという明治政府の政策により、各宗派に「管長」を置くことが命じられ、その結果、最初の管長となった千家尊福(第80代出雲国造・出雲大社司宮)によって大社教は明治15年に設立されました。そして、政治的に画一化が進められていく時代にあって、大社教は神道の伝統的な多様性を持続していくことに大きな役割を果たしていったのです。

### 密教儀礼と龍、宝珠、神道

一昨年、真言密教の歴史的な展開、とくに中世における密教儀礼の深奥を探った著書を刊行。現在は、その成果を踏まえて、中世の密教と神道の関係について分析を進めている。

500ページに及ぶその意欲的な大著は『祈雨・宝珠・龍…中世真言密教の深層』。雨乞い儀礼に紙数を割き、その背景に成立した「龍」への信仰や、複雑に関わる仏舍利、宝珠への信仰展開も絡めて論じた。

同書の執筆を経ることで、「中世の密教儀礼にとって、他の信仰など宗教的諸相はどう見えていたか」といった新たな課題が現れてきた」と言う。中世神道でも龍や蛇の信仰はしばしば強調される。しかし今後は、「新たな視点からの密教と神道との関係の捉え直し」を提供していきたい」と話す。



## 話題のこの人

中世密教と神道の関係を捉え直す

# ステイブ・トレニンソン博士

早稲田大学国際教養学部准教授

### 「米粒」のイメージから

その「新たな視点」として、「神道灌頂」「十種神宝」「米粒」の三つを挙げる。

「密教的に師匠から弟子へと灌頂儀礼で伝えたものですが、それは中世に理解されていた神道のエキスであることも多かった。つまり『神道灌頂』だった」

その神道灌頂にも関わるが、「十種神宝」という宝物も注目されると言う。「たぶんお坊さんだと考えられる人物が、仏教的な宝珠からインスピレーションを受けて、十種神宝のユニークな図像を描いています」。

そして「米粒」。中世の宝珠の図画には、米(粳)からイマジネーションを受けたと思われるものがあるという。「神道的な宝珠の背景には、仏教の玉の影響だけでなく、『米粒』の生物学的なイメージが潜んでいると、私は考えています。米は神道と不可分のものですからね」こうした密教と神道の混交した実態への論考は、近々、論文などで発表する計画だという。

### ケーススタディから理論へ

ベルギー出身。ゲント大学で修士を修めた。教授から護摩供養を教えられ、日本密教に関心を抱いたのが発端。「金剛頂瑜伽護摩儀軌」という漢文テキストを分析し、論文を仕上げた。

続いて京都大学大学院に進学。学者としての態度も同時に叩き込まれた。「浅い考察でなく、よくよく考えて批判的に検証する。実証的な研究が要求されるということですね」。京大で修士・博士を得たが、「まだ『論』を手にしたとは思えなかった。論と知識は違います。何を論じるか。独創的な論からは遠かった」と、自己に厳しく振り返る。

その後、「何かが見えてきた」との思いとともに論じたのが、このたびの著書。「とはいえ、この本もケーススタディの一つに過ぎない」と言う。「でもそれは大切なこと。膨大なテキストを文献学的に実証し、ケーススタディを積み重ねる。結果として、いつか大きな理論が出てくる。つまり、私の研究スタンスは帰納法なのです」。

## 『サッカーと神道』

金光教泉尾教会 総長／(株)レルネット代表 三宅善信

4年に1度、世界中が熱狂するサッカーの祭典 FIFA ワールドカップ大会がロシアで開催されている…。と書くと、読者の中には、「日本代表チームのエンブレムが神武天皇を大和まで導いた熊野の八咫鳥…」と思われた方も居るであろうが、この『神道DNA』で私がそんな陳腐な話を書くはずがない。

そこで、神道国際学会の目的のひとつ「日本文化のエッセンスである神道を国際社会に正しく伝える」ということを考える際に直面するであろう困難を予見するために、世界中の誰もが知っているサッカーというスポーツを実例として論考を進める。

江戸中期の国学の勃興以来、神道界では長年「言挙げしない」という態度が美德とされてきた。おそらく、「新興の学問」を構築しようと目論んだ国学者たちが、すでに精緻な訓詁学の方法論等が確立され、江戸時代の学問の主流であった儒学者たちに対抗するため、儒学者の学問的研鑽を「漢意」と貶め、学問体系としての自らの未熟さを「やまとごころ」として正当化しようとした辺りは、千年の神学的営みの積み

重ねがあった欧州のカトリック神学に対抗して、新興国アメリカの神学者が提唱した「反理性主義」と相通じるものがある。

インターネットを通じて、地球の裏側に居る会ったこともない人とも意見を戦わせることができるようになった現代…、企業や大学といった組織はいまでもなく、たとえ一国の指導者であったとしても、その発言や一挙手一投足が瞬時に世界中から批判され、揶揄されるようになった現代社会において、その人物（団体や国家）の価値は、ほとんど「言挙げ能力」の大小によって決まると言っても過言ではない。

正直言って、私はサッカーというスポーツが好きになれない。その最大の理由は、相手選手と接触プレイをした選手がわざと派手に転倒して「大仰に痛そうな顔をして、私こそが被害者である」というふうに審判にアピールするからである。また、審判もそのアピールを受け入れて笛を吹き、倒された（＝自分から倒れた）選手にフリーキックを与えることが多い。しかし、その大半が「演技」であることは、もし審判が笛を吹かなかつたら、傷ついて倒れたはずの選

手がサッと起き上がって、走って自分のポジションに戻って行くことから明白である。

他にも、接触プレイの際に相手選手のシャツやパンツを引っ張って、敵のプレイの邪魔をするのが日常茶飯であるけれど、これも、もし本当にシャツやパンツを引っ張られることを避けたいのであれば、スピードスケートの選手のような身体にピッタリとフィットしたユニフォームにすれば、そのような卑怯な行為は簡単に防げるはずである。にもかかわらずそうっていないということは、サッカーというスポーツは、相手の服を引っ張って妨害したり、自分の受けた「被害」を過大に申告することが「推奨され」ている。換言すれば「卑怯な選手が良い選手」という価値観のもとに行われているスポーツである。

そして、キリスト教が文化的背景にある欧米諸国はもとより、イスラム教が文化的背景にある中東やアフリカ諸国においても、また、仏教や儒教や道教が文化的背景にあるアジア諸国においても、サッカーが最も人気のあるスポーツであるということは、「（自分こそが被害者だと）派手に言挙げする能力こそ大事である」と考える人々が人類社会の大半であるということであり、国際社会において日本人が不当に悪者にされないためにも、ドンドン言挙げしてゆくことこそ重要である。



## 東京都慰霊堂

Tokyo Hall for the Repose of Spirits

マイケル・パイ (マールブルク大学名誉教授)

シリーズ第6弾は、東京の震災記念堂の絵葉書です。震災記念堂は、1923年（大正12年）の関東大震災で死亡したすべての人々の慰霊のために、1930年（昭和5年）に建てられました。そして、葉書の裏側には、「はがき」ではなく「はかき」という言葉が印刷されているので、1933年以前に印刷されたことがわかります。つまり、記念堂が建てられてまもなくこの絵葉書が作られたのだとわかります。

この建物は、東京の地下鉄両国駅から数分のところにある横綱町公園のメインの建物です。この場所には、1923年9月1日に発生した地震の直後、数千人の人々が避難していましたが、街を覆い尽くした巨大な火災によって焼死してしまっただけです。

記念堂の建築家は、記念碑的建築物のデザイナーとして非常によく知られていた伊東忠太（1867-1954）でした。市民の記念碑として建てられた、ホールあるいは「寺院」と呼べるこの建物は、八幡神社スタイルのがっしりとした正面部分と、仏教スタイルの三重の塔を後方に持ち合わせています。神仏が公式に分離され



ていた時代にあって、このような神道と仏教の伝統を併せて強く示す建築がなされたのです。葉書に見られる“commemoration temple（記念寺）”という英語の表現は、少なくとも一般的な意味で、それが宗教的な建物だと考えられていたことを示しています。

ここには関東大震災の絵画だけでなく、1945年の東京大空襲による大惨事の写りが飾られています。空襲で建物自体も破壊されましたが、1951年に同じ形で再建されて、空襲の犠牲者もここに奉安され、名前は東京都慰霊堂に変更されました。近年、季節の花に覆われた屋外記念碑が建てられ、ここに奉安される人の

総数は163,000人であると言われていますが、死亡者の数字は正確ではないでしょう。

メインホールには、グループ用の座席があり、花やその他の奉納品の祭壇に面しています。また、多くの神社仏閣のように、賽銭箱もあります。私的な祈りの形式は規定されていませんが、祈りの動機は、建物の名前が示すように、亡くなった人々の霊を慰めることです。後方の塔の1階は納骨堂となっています。

例年3月10日と9月1日に、それぞれ様々な宗派の仏教僧侶による慰霊大法要が行われています。

# 平安神宮で神道史学会大会開催

6月3日、平安神宮の記念殿ホールにおいて第64回神道史学会大会が開催され、代表の清水潔皇學館大学学長をはじめ、國學院大学や皇學館大学の院生を中心に若手の研究者約80名が参加した。本学会からは三宅善信理事長が出席した。学術大会に先立つ6月2日、平安神宮への正式参拝や宝物館の拝観、明治維新関連史跡等の見学が行われ、夕方には、平安神宮会館で懇親会が催された。

今年、明治維新から数えて150年、また来春には200年ぶりとなる「讓位」が予定されているなど、即位式や大嘗祭などの宮中儀礼や国家権力と神道との関係があらためて注目される。中でも神道史学会大会となり、インバウンドの外国人観光客と6月の大安で日曜日という結婚式の集中日で賑わう平安神宮での学術大会は、神道界以外の人々からも関心を抱かれた。学術大会では9名の若手研究者が次々と日頃の研究成果を披



平安神宮の記念殿で開催された第64回神道史学会大会の様子

露したが、中でも佐野真人皇學館大学助教による『讓位の儀における剣璽の渡御について—平安時代の事例を中心に—』と、江頭慶宜龍造寺八幡宮禰宜による『地方大名と即位式・大嘗祭—佐賀藩の事蹟を主に—』が注目を集めた。

佐野氏は、いわゆる「三種の神器」が皇位の象徴となった平安時代、当初は、先帝の崩御から新帝への践祚に伴う即位の礼において、剣璽の渡御は昼間の儀式として執行されたのに対し、神鏡はその宗教性ゆえ、伊勢の神宮の遷御の儀同様、夜間に渡御されていたものが、院政が一般的になった平安時代後期には、剣璽を伴った天皇による皇太子への「讓位」の宣命と先帝の高御座からの退出から新帝の登極と撰関諸大臣以下、百官への謁見。さらには、「幼帝」が続出した時代には、讓位の儀式そのものに「主役」である新帝が出席せず、剣璽を撰関（大臣）が先帝のもとから新帝の御座所へ届けるなど、儀式が長時間化し、ついには、剣璽の渡御も神鏡の渡御同様に夜間に行われるようになったプロセスについて詳しく説明した。

また、江頭氏は、一般的には『禁中並公家諸法度』によって、天子はもとより公家と徳川将軍

家を除く諸大名との交流が厳しく禁じられていたと思われている江戸時代においても、天子の代替わり（即位礼）に際しては、将軍家や御三家はもとより全国の諸大名から、その家格や石高の応じて多くの金品が献上されていたが、こと大嘗祭に関しては、「天子の秘蹟」として、将軍家以外には、その運営に関わることはおろか、その存在さえ隠していたが、実際には、長年にわたる平穏な時代と公家の経済的困窮に起因する宮家や撰関家・清華家と諸大名家との婚姻や養子縁組等を通じて、個別に皇室の情報を得ており、大嘗祭に関する書物も数多く諸藩に伝わっていた。それらのことが、幕末期の尊皇思想の盛り上がりの一役買ったと分析した。

最後に、阪本是丸國學院大学教授による『明治維新と神道の変革』と題する熱のこもった記念講演が行われた。

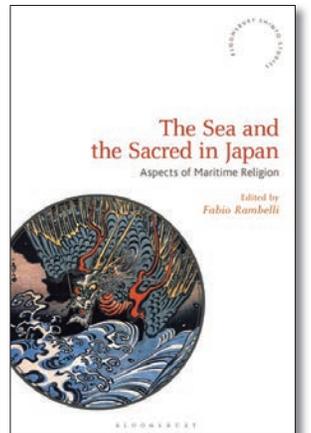
日本が近代国民国家へと脱皮した150年前の明治維新がもたらせた神道の変革をあらためて捉え直し、200年ぶりに行われようとしている「讓位」に伴う諸儀礼の今日的意味、さらには、われわれが初めて体験する「上皇」のもたらす影響など、激動する国際情勢の中で、日本人が日本人たる所以について考えさせられる平成30年度の神道史学会であった。

## The Sea and the Sacred in Japan: Aspects of Maritime Religion

Fabio Rambelli [編集]

Bloomsbury USA Academic, 2018年7月12日刊、288ページ、ISBN978-1-35006085-6、本体US\$136.00

評／Andrea Castiglioni (University of California, Santa Barbara)



神道国際学会理事であり、カルフォルニア大学サンタバーバラ校教授のFabio Rambelli氏が2018年に編集した『The Sea and the Sacred in Japan: Aspects of Maritime Religion』は日本宗教学を発達させるために必要な本となるであろう。なぜなら、日本宗教の言説に関する解釈は「内陸的」考察が主に行われ、「海」からの展望を重視しない傾向があるが、この本では、このような分析の逆からのアプローチの重要性が説かれているためである。

序論でRambelli氏は、日本の宗教学において「内陸的」考察が重要視される原因に触れている。その一つは、古代神話に現れる天皇と関わりのある神々が高天原から日本列島へ降りて来たことに由来し、このことから日本の宗教は垂直性を示し、内陸の農業や山に基づいていると考えられ、「海」の大事な役割が見逃された点である。また、宗教学者の折口信夫(1887-1953)は、海から来る福の神を意味する「マレビト」と、海の底にある聖域を意味する「常世」の研究をしたが、彼の理論は柳田國男(1875-1962)のそれと相反し、結局柳田の内陸的要因と稲作文化に基づいた日本宗教の解釈が最も有力なものとなった。本書の中でAllan G. Grapard氏は、海信仰の特徴である「流動性」を解釈の模範として定義し、この概念により日本宗教に重要な神と仏の習合性、信仰の論理、儀礼の構造をさらに理解することが可能性であると述べている。

本文は四つの章に分かれている。

①「海に関する古代神話、儀礼とその解釈」は、『古事記』と『日本書紀』の海の描写と大嘗祭の関係(Mark Teeuwen氏)、海の神饌とその儀礼(佐藤真人氏)、伊豆島から来た古い師による祓いの儀礼(Jane Alaszewska氏)、近世の沖ノ島の海信仰と現代のUNESCOによる島の世界遺産認定(Lindsey E. DeWitt氏)である。

②「海の神と信仰」は、鳥根県的美保神社で行われる恵比寿への楽器の供え(大内典氏)、神功皇后信仰と海の神信仰の伝説(Emily B. Simpson氏)、日本と中国、韓国の媒介装置としての新羅明神信仰と海の関係(Sujung Kim氏)、戦争の神としての八幡信仰と倭寇に祀られた神(Bernhard Scheid氏)、修験道における修行の実践に与えた山と海の影響(Gaynor Sekimori氏)である。

③「グローバル・オーシャンにある仏教と日本」は、大陸からの伝播時に海を渡った仏教に関する縁起とその地域的展開(阿部泰郎氏)、中世日本社会のイメージする海の向こうにある国(伊藤聡氏)、前近代日本の仏教の宇宙論と西洋の地図製作法が相互に与えた影響による海の変化(D. Max Moerman氏)である。

④「解釈論」は、宇宙の起源として考えられた海に関する中世神話のテキスト分析(金沢英之氏)、折口信夫の海信仰論にあるマレビトと結びの神の役割(斎藤英喜氏)、大祓えの儀礼、宝船信仰、漁師社会における船霊信仰の関連性(Fabio Rambelli氏)である。

この本は、読者に日本宗教と海の関係を見直し、また記号と意味の移動装置としての海を再考させる。日本宗教を考える時に存在するコンセプトとして、キヨメとケガレ、近距離と遠距離、内と外のような「反対性」だけではなく、相反する要素を互いに取り込む「流動性」の重要性を示す。この本の価値は、今まで日本宗教を解釈するために使われた範疇を考え直し、幅広い研究の方向と新たな解釈の可能性を伝えるものである。

三宅善信理事長

1月18日 来日したノーベル平和賞受賞者のベアトリス・フィンICAN事務局長と会談。  
1月27日 大阪ユネスコ協会70周年記念式典・シンポジウムに列席。

2月14日 核兵器禁止条約締約交渉について、前外相の岸田文雄自民党政調会長と会談。

2月19日 24日 ジョージワシントン大学を視察。

3月9日 天理大学で開催されたWCRP平和大学講座で主催者を代表して挨拶を行う。

4月9日 14日 オランダで開催されたIARF国際評議員会に出席。

4月19日 産経新聞副社長を講



ICAN（核兵器廃絶国際キャンペーン）のフィン事務局長と



天理大学で挨拶を行う

師に招いて開催された国連午餐会で、関西国連協会理事長代行として挨拶を行う。

マーク・テーウエン理事

6月12日 芳村正徳常任理事が会長を務め、三宅善信理事長が事務局長を務める国際宗教同志会の例会で、記念講演を行う。

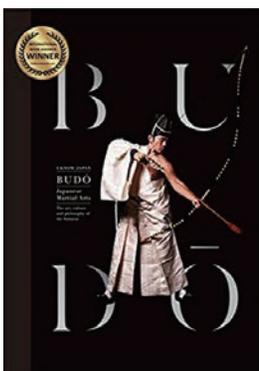


テーウエン理事を講師に国際宗教同志会例会開催

アレキサンダー・ベネット理事

書籍

Japan: The Ultimate Samurai Survival Guide, Tuttle, 2018  
BUDO Japanese Martial Arts, Nikko Graphic Arts, 2018  
(2018インターナショナルブックアワード/多文化ノンフィクション部門 最優秀賞受賞)



The Complete Musashi: The Book of Five Rings and Other Works, Tuttle, 2018  
Bushido: The Soul of Japan Annotated, Tuttle 2018  
Bushido for Beginners, Tuttle, 2018



『日本人はなぜ外国人に「神道」を説明できないのか』  
山村明義、ベストセラーズ、2018年、815円(税別)  
『宗教と資本主義・国家』  
池上彰/佐藤優/松岡正剛/碧海寿広/若松英輔、KADOKA

WA、2018年、1600円(税別)  
『神国』日本 記紀から中世、そしてナショナリズムへ』  
佐藤弘夫、講談社、2018年、940円(税別)  
『人を楽にしてくれる国・日本』韓国による日韓比較論』  
シンシアリー、扶桑社、2018年、1400円(税別)

『満州天理村「生疏里」の記憶』天理教と七三部隊』  
Tsujimoto, Aimee、えにし書房、2018年、2000円(税別)  
『神道新論——日本の言葉から明治維新百五十年を考える』  
河村央也、作品社、2018年、1600円(税別)  
『古代神宝の謎——神々の秘宝が語る日本人の信仰の源流』  
古川順弘、二見書房、2018年、1600円(税別)

大崎直忠前理事長を偲んで

神道国際学会理事長 三宅善信

5月23日、本学会の設立発起人である大崎直忠前理事長が帰幽された。享年85。30代半ばの若造だった私が理事の末席に加えていただいた際、山折哲雄先生や米山俊直先生といった学会の泰斗の先生方と親しくご高誼を賜る機会を得たこと以上に、国際ビジネスの世界で活躍をされている大崎直忠氏のような人が常任理事として、とかく重箱の隅を突いたような議論に終始しがちなこの種の学会に、まったく違った角度から光を当ててくださっていることに感銘を受けた。

外国通信社の東京支局長や米国コカコーラ本社の広報部長といったユニークな経歴で培われた大崎氏の卓越したマネージメント能力は、梅田善美初代理事長亡き後の難しい時代に、2代目理事長として学会運営の舵取りをしてくださり、現体制に繋げてくださった。御霊の安心をお祈り申し上げます。

神道国際学会からのお知らせ

- ◎いつも社報や刊行物をお送りくださり、ありがとうございます。
  - ◎ご入会のご案内: 神道国際学会にはどなたでも入会できます。資料をご請求ください。
- |                |           |
|----------------|-----------|
| 一般会員(年会費)      | 3,000円    |
| 賛助会員(年会費)      | 10,000円   |
| (法人会員(年会費)     | 100,000円) |
| 特別賛助会員(個人・一時金) | 30,000円   |
| 特別賛助会員(団体・一時金) | 500,000円  |

NPO法人 神道国際学会 〒158-0096 東京都世田谷区玉川台2-1-15 ベスト用賀2F  
Tel. 03-6805-7729 Fax. 03-6805-7769 info@shintou.org

編集後記

ちょうど一年前の神道フォーラム55号(平成29年8月1日発行)で海と神道の関わりについて取り上げる記事を掲載いたしました。そして、本会では本年3月の社員総会時に国際神道セミナー「海と神道」を開催し、今号ではその報告記事を掲載しております。皆様におかれましては、55号を取り出して、その内容を振り返っていただけますと幸いです。今号でも、お馴染みの連載記事、そして各行事の報告記事等、ご興味をもって、ご一読いただけますことを願っております。なお、神道フォーラムのバックナンバーは、本会ホームページ上でご覧いただくこともできます。また、毎号のテーマカラーの選定にも頭を悩ませている編集部ですが、今号では、さわやかな緑を採用いたしました。暑い夏の日々に、わずかも涼をお届けできればと存じます。